



昭和初期のころの店頭での蜂蜜出荷作業

日本初 巣礎を製品化

ピンチをチャンスに変える

老舗探訪

東海企業ウォッチング

52

材木商から養蜂参入 新聞発行し情報流通

秋田屋本舗

一八〇四年創業

岐阜市

近代養蜂発祥の地、岐阜 20年以上の歴史を持つ
岐阜。明治時代に西洋ミツバチが導入され、岐阜
と初代、中村源次郎は、
は西洋ミツバチ養蜂の先
岐阜市本町で材木商とし

販者を輩出した。岐阜は、
て創業。秋田杉を取り扱
ミツバチが好むレンゲ裁
つていたことから、屋号
培が盛ん。多くの養蜂業
を「秋田屋」と名付けた。
者が最高ブランド、レン
養蜂事業を始めたの
グ蜂蜜(はちみつ)を生
は、6代目「中村源次郎」

み出して
いるほ
か、黒箱
など関連
資材の生
産・販売
の産地で
もある。
秋田屋
本店(本
社岐阜市
加納富士
町)は、
養蜂関連
として1

西洋式の養蜂が始まった
のをみて、明治20年(1
887年)に養蜂部を設
立した。6代目は、昆虫
学者、名和靖氏とともに、
日本で初めて「巣礎(ミツ
バチの巣の基礎)」「いろ
は巣礎」を製品化したこ
とで知られている。
中村正社長は「当社は
良質な秋田杉から黒箱を
つくることで材木商と養
蜂を結び付けた。まさに
ベンチャービジネスの先
駆け」とする。

さらに6代目は、養蜂

の最新情報を「養蜂いろ
は新聞」として編集・発
行。7代目はカタログ
「秋田屋商報」を刊行し、
現在に至るまで継続され
ている。「モノだけでなく、
情報を流通するメデ
イア・ミックスの先駆け
でもあった(中村社長)。

養蜂関連としてスター
トした向社も、現在では
ハチミツ生産はじめ食品
加工を主力とするメーカー
カ、化粧品メーカーと
幅広い。中村社長は「素
材を核に、アレンジ商品
としての研究
開発を今後も
続ける」とい
う。

素材を核に6品目展開 受粉用優良種繁殖も力



岐阜県内各所で養蜂場を運営している(写真は山県市の伊白良養蜂場)

ローヤルゼ
リン、プロ
ポリスに加
え、蜜蜂花
粉や蜜ロウ
(巣を構成
するロウ)、
鍼灸などに
用いられる
蜂針液の6
品目があ
る。健康で繁殖力が
旺盛なミツバチを育てる
ために、世界から品種を
輸入し交配させていると
いう。

9代目 中村正さん

商売を続けていくことは常に
困難がつきまとうものです。困
難を克服し、次につなげていく
このために、守るべきものと変
革するべきもののバランス感覚
が必要です。



材木から養蜂をはじめ、常に
業界の先駆者として先発メリッ
トを追求して来ました。

私自身、ローヤルゼリーやア
ロポリスなどの健康食品素材を
業界でいち早く開発・製品化す

先発メリット 常に追求

ることに力を注いでいます。7
月に迎える選挙を機に、8代目
までが名乗ってきた「中村源次
郎」を襲名するべく、準備を始
めるつもりです。
東日本大震災では、需要家で
ある、東北地域のハウス栽培農
家が大きな被害を受けました。
当社もミツバチの出荷先を失
い、これから影響が出ると思
いますが、被災地の復興を主力
で応援していきたいと思
います。
ミツバチは豊かな自然環境で
元気に育ちます。自然環境を持
続させるため「NPO法人きふ
スローライフ市民フォーラム」
(岐阜市)の理事長として「ス
ローライフ」活動を推進してい
ます。これも私の務めだと考え
ております。